

蓮社列祖としての延寿と宗贖

柴 田 泰

一 問題の所在

(蓮社始祖・継祖)

慧遠—善導—法照—少康—省常—宗贖

『榮邦文類』宗曉(二一九九年)

(蓮社七祖)

慧遠—善導—承遠—法照—少康—延寿—省常

『仏祖統紀』志磐(二二六九年)

永明延寿(九〇四—九七五)と長蘆宗贖(？—一一〇六?)

は禪宗思想史でも高く評価される勝れた禪師であるが、一方、浄土教にも深く係った禅僧として、後に浄土教の系譜、蓮社の列祖とされる。その典拠が『榮邦文類』と『仏祖統紀』であるが、この僅か七〇年ほどの間に、宗贖と延寿が入れ替わっている。それはなぜか。これが本稿の第一の問題である。

そこで、延寿と宗贖についての従来の、主に浄土教研究の

見解であるが、

延寿は唯心浄土・禅浄双修を主張した最初の思想家で、その代表的標語が「四料簡」(有禅有浄土、猶如戴角虎)である。宗贖はとくに称名念仏を強調するから、その継承者である。

とされている。それを批判して、

従来の見解は後の資料で解釈しているが、『宗鏡録』『万善同帰集』に依る限り、延寿は諸仏の唯心浄土は主張したが、弥陀の浄土を低くみている。従って、禅浄双修思想家でなく、「四料簡」は後世の仮託である。弥陀の唯心浄土の最初の思想家は四明知礼、禅系では、宗贖こそ禅浄双修の最初の思想家である。

というのが、筆者の見解である。それでは、これまでどうして延寿が唯心浄土・禅浄双修の最初の思想家とされていたか。これが第二の問題の所在である。

本稿では、初めに延寿と宗贖の思想と初期資料の伝記を確認し、次いで浄土教の立場からその後の評価の変遷を辿り、両師の史実と変遷、実像と虚像を明らかにしよう。

二 延寿の思想と初期の伝記

初めに、延寿の思想と伝記を詳しく調べると、彼の中心思想は大著『宗鏡録』百巻で説く天台・華嚴・禪などのすべての思想を総合した壮大な唯心哲学である。しかし、そこには浄土思想は殆ど認められない。また『万善同帰集』は題名通り万善諸行ことごとく実相に帰すことを説く。このうちの六項目を後に浄土思想と会通し収録したのが『楽邦文類』宗曉である。従って、延寿の浄土思想はそれまで具体的には指摘されていなかったわけである。次に、延寿の伝記であるが、最も早い『宋高僧伝』巻二八（九八八年）、『景德伝燈録』巻二六（一〇〇四年）では、

若くして仏教に帰し、『法華経』を誦す。二十九歳出家し、厳しい修行をする。次いで、天台徳韶に嗣法し、多くの人々を教化する。法華を誦すること計一万三千部、万善同帰・宗鏡等の録、数千万を著せり。法眼宗第三世。

と伝える。そこには厳しい禪師像を伝えるが、浄土思想は一つも言及されない。

史実や伝記は最初の史料を重視すべきという歴史学の基準に従えば、延寿の浄土思想は多く事実ではなく、後の創作とということになる。

蓮社列祖としての延寿と宗贖（柴 田）

三 その後の評価

一 最初期の評価

往生人としての延寿像はその後『新修往生伝』（二〇八四年）に現れ、そこでは一〇八事の諸行と上品往生の人と伝える。⁶⁾さらに『禪林僧宝伝』（一一一九年）では浄土思想は認められないが、「慈氏下生」と号され、「読自行録、録其行事、日百八件」と認められる。⁷⁾

ところで、この自行録は今日統蔵経に収められているが、その内容には問題がある。要点に限ると、

・延寿の行業でありながら、往生行が多い。
・所依の浄土經典は阿弥陀仏真言と往生呪だけである。

・陀羅尼思想、施餓鬼行が多い。⁸⁾
など、延寿の唯心思想と全く異なる修行が多すぎることである。しかし、後の人々は「延寿は一日に一〇八もの修行を行つた厳しい禪師」と尊敬した。

丁度、そのころ宗贖が活躍する。『統燈録』巻一八（一一〇一年）などによると、

若くして儒教を習い、法雲法秀に投じ、のち長蘆応夫の法を嗣ぐ。著『禪苑清規』。

と伝える。そこにも浄土思想は認められない。¹⁰⁾

延寿と宗贖が共に登場するのは、王日休『龍舒浄土文』（一

一六一（一〇八事、上品生）、宗蹟は引用文二点「勸孝子、勸參禪人兼修淨土（『蓮華勝會録文』）である。⁽¹⁾ あれだけ多くの淨土文を収録しながら、延寿の引用文がないことは、王日休は延寿を往生人と考えても、延寿の著作の中に淨土思想を見出していいことになる。ほぼ同世代の『淨土詠史』（一一六三年）に「智覺（延寿）、慈覺（宗蹟）」「正觀記」（一一八一年）に「今朝禪即寿禪師蹟禪師……」と認められるから、この頃には延寿と宗蹟は淨土思想家としても並び称されていたようである。

二 『樂邦文類』の評価

こうした経緯を経て、『樂邦文類』宗曉（一一九九年）が著される。そこには後の淨土教史を決定づける幾つかの特徴が認められるが、延寿と宗蹟に限ると、⁽²⁾
まず、延寿では伝記に「二圖」が新たに加わる。

延寿は二つの圖を作った。一つは「一心禪定」、一つは「誦經万善莊嚴淨土」の圖で、七度引いたが、七度とも「誦經万善生淨土」で、その後、専ら淨土行を行った。⁽³⁾

という挿話である。

法眼宗第三世の厳しい禪師で、天台・華嚴を極めた延寿が、「禪定」を捨てることはありえない。おそらく『万善同帰集』や一〇八事の修行を元に淨土教系の誰かが創作したのであろう。さらに、宗曉は初めて淨土文類として『万善同帰集』六

重問答と「神棲安養賦」を収録する。ここに二二五年を経て、淨土思想家としての延寿が具体的な資料で登場したのである。

しかし、冷静に引用文を分析すると、そこには上品の禪定による唯心淨土の悟りと、末品の念仏による西方淨土の往生の、二つの淨土が説かれており、明らかに機根も行業も果報も異なる。彼は下品の念仏による西方淨土往生は認めながらも、自身は上品の禪定による唯心淨土を志向した。それゆえ後の人は、「延寿は一〇八事の厳しい修行を行った上品生の人」と見なしたのである。

以上のように、延寿は著述と初期の伝記による限り、唯心淨土・禪淨双修の思想家ではなかったが、『樂邦文類』によって初めて淨土思想家としての地位が確立したことになる。『樂邦文類』の影響は極めて大きく、後の人々は無前提にそれを踏襲し、今日の見解にも認められる。

一方、宗蹟については、伝記では念仏結社の蓮華勝會と称名念仏を伝え、さらに淨土資料六文を収録する。⁽⁴⁾ 実は宗蹟の淨土資料はこれだけで、資料的限界はあるが、しかし、この引用文に限っても、觀經「是心是仏」・唯心淨土と称名念仏往生が認められ、彼はそれを「念而无念」「生而无生」と解釈する。従って、宗蹟こそ弥陀の唯心淨土も称名念仏も説いた最初の禪淨双修思想家ということになる。

こうして、『樂邦文類』に収録された両禪師の資料を比較

検討すると、宗暁は引用数も思想内容も明らかに宗蹟を評価している。加えて、廬山慧遠の再興を意図して浄土資料を収録した『楽邦文類』には、念仏結社は省けないわけで、宗暁は『蓮華勝会を結んだ宗蹟こそ、蓮社継祖に相応しい』と中国浄土教の系譜に位置づけた。

三 『仏祖統紀』の評価

ところが、それから僅か七〇年後の『仏祖統紀』によって、延寿と宗蹟の評価は逆転する。

天台宗の正当性を主張した『仏祖統紀』五四巻は、歴史書ゆえに引用文はなく、伝記だけであるが、前に做つて両禪師の伝記を見ると、延寿を「蓮社七祖」の第六祖に位置づけ、それまでの延寿伝（二編、一〇八事、慈氏下生、上品生）を統合し、とくに『万善同帰集』を浄土思想を説く最も重要な書（『万善同帰集指帰浄土最得其要』）と最大級の賛辞で評価する。

さらにその前の「少康伝」には延寿の師、天台徳詔の故事を載せる。ここに少康―徳詔―延寿の師資相承が史料的に実証される。一方、「蓮社七祖」に続く「浄土立教志」の宗蹟伝には、僅かに蓮華勝会録と浄土頌の題名を挙げるのみである。明らかに、両禪師の評価に大きな違いが現われている。この違いはどこからきたのか。

まず第一は、『楽邦文類』は廬山慧遠の遺風と天台浄土教の再興を意図した浄土資料のみの文類である。従つて、撰者の

宗暁は浄土資料の収集に全力を注いだのであつて、禪師の浄土資料には関心があつても、禪宗そのものには全く関心を持つていない。それに対して、『仏祖統紀』は全仏教の中から、天台宗の正当性を立証しようとした膨大な歴史書である。当然、撰者志磐は諸宗に深い関心を持つていたわけで、彼は「浄土立教志」に続けて「諸宗立教志」を立て、その最初に「達磨禪宗」として六祖までと五家を紹介する⁽¹⁷⁾。このように当時の禪宗に対する関心の違いがまず考えられる。

次に考えられるのは、当時の仏教界の状況である。この時代十二世紀から十三世紀にかけては、とくに禪宗が盛んで、大慧宗杲（一〇八九―一二六三）の公案禪、宏智正覺（一〇九一―一一五七）の默照禪、あるいは『碧巖録』『從容録』『無門関』が作られている。また禪系浄土教では唯心浄土が主流となり、眞歇清了などによつて「念仏禪」が提唱された⁽¹⁸⁾。

そこに、延寿と宗蹟の思想を重ね合わせると、延寿は法眼宗第三世、壮大な『宗鏡録』の唯心思想、その実践は一〇八の修行、宗暁によつて会通された最初の唯心浄土思想家、浄土行は觀經般舟三昧經による正禪定である。それに対して、宗蹟は『禪苑清規』の功績は大きいとしても行儀であり、浄土思想は念仏結社と称名念仏にすぎない。この場合、禪師としても浄土思想家としても、延寿が評価されるのは当然で、この後、中国浄土教は後の高僧が加わつて「九祖」「十三祖」

と展開する。¹⁹⁾

さらに考えられるのは、念仏結社に対する評価である。念仏結社の流行も宋代浄土教の特徴であるが、とくに子元（一〇八六一—一六六？）を祖とする「白蓮宗」は特異な集団であったようで、子元自身も一度配流されるが、『釈門正統』（一二三七年）、そして志磐も邪教とする。かつて、宗暁によつて高く評価されていた念仏結社も、志磐の時代には様相が変わり、邪教視されていた。

こうして見ると、宗蹟と延寿の入れ替えは撰者宗暁と志磐の立場の違いだけでなく、当時の時代社会を背景として、とくに延寿に対する評価の違いが強く係っていることが考えられる。なお、今日、延寿の禅淨双修を端的に示す「四料簡」は、弥陀浄土を低く考えた延寿の思想ではなく、禅と浄土を対等に考えた明代に作られたものと思われる。²⁰⁾

四 結び

思想は時代社会とともに絶えず変容する。それゆえ偉大な思想家には、実像と虚像の差は大きく、それが往生人としての延寿像の変容である。われわれは後世の資料を鵜呑みにするのではなく、最初期の資料でまず実像を明らかにしなければならぬ。しかし、思想がそれぞれの時代社会の所産と考えれば、虚像はその時代社会の実像であつたわけで、諸資料

をそれぞれの時代社会に即して読み取らねばならない。

これまで、宋代以降の浄土教研究は、唯心浄土にせよ禅淨双修にせよ、多く後世の資料で延寿と考えていたがゆえに、その後の諸師の具体的な内容、生き生きとした展開が見えていなかったように思われる。諸資料をそれぞれの時代に位置づけることによつて、全く新たな宋代以降の浄土教が見えてきたようで、その他の事例は別に発表を予定している。

1 『桑邦文類』卷三（大正四七・一九二中下）、『仏祖統紀』卷二六（大正四九・二六〇下）。

2 中国浄土教の系譜に関して、本稿の延寿と宗蹟の入れ替え以上に關心を引く問題は、始祖廬山慧遠（三三四—四一六）に継いで、史実としても思想的にも全く繋がりのない善導（六一三—六八二）を第二祖としている点である。とくに日本浄土教では慧遠流と善導流は峻別され（『浄土三流』『選択集』）、従来の見解でも、いま慧遠流の系統を見るに、善導を以て慧遠流の第二祖となしていることは、甚だ解し難いことと言はねばならぬ。（道端良秀「中国浄土教の時代区分とその地理的考察」『中国浄土教史の研究』）とされていた。

しかし、それは廬山慧遠を観想念仏、善導を称名念仏と峻別した日本浄土教から見た非難であつて、中国浄土教の立場では、同じ「般舟三昧行の高僧」と見たので誤りでない。拙稿「中国浄土教の系譜」『印度哲学仏教学』第一号。

3 たとえば、服部英淳「永明延寿の思想」『浄土学』第十四輯（『浄土教思想論』）、藤吉慈海「禅淨双修の根拠」『印仏研』第二

二卷第二号(「禪と浄土論」)、同「禪浄双修論」「禪浄双修の展開」福島光哉『宋代天台浄土教の研究』一六一—二四、一一九—一二五頁など。

4 拙稿「中国浄土教における唯心浄土思想の研究(一)」「札幌大谷短期大学紀要」第二二号、四四—九七頁、同「中国における禪浄双修思想の成立と展開」『印仏研』第四六卷第二号。

5 『宋高僧伝』巻二八(大正五〇・八八七中)、『景德伝燈録』巻二六(大正五一・四二二—四二七)。その後の主な資料「禪林僧宝伝」巻九、『林間録』巻下、『釈門正統』巻八、『釈氏稽古略』巻四、『僧信伝』巻九、『五燈会元』巻一〇など。

6 『新修往生伝』巻下(「浄土宗全書」統一六卷、一二四—二二五頁)。

7 『禪林僧宝伝』巻九(統蔵「新文豊出版」巻二三七、四七八—四八二頁)。

8 拙稿前掲「中国浄土教における唯心浄土思想の研究(一)」「一八七頁」。

9 主な資料は「建中靖国統燈録」巻二八、『普燈録』巻五、『五燈会元』巻一六、『釈氏稽古略』巻四、『統伝燈録』巻一二など。

10 ただし、彼の著「禪苑清規」巻四、七「病僧、亡僧」(統蔵巻一一、八九八、九一三—九一四頁)には浄土思想が認められる。なお、近藤良一「禪苑清規に於ける浄土思想」『北海道駒澤大学研究紀要』創刊号参照。

11 『龍舒浄土文』巻五、六、一一(大正四七・二六八中下、二七一上中、二八三—二八五上)。

12 「浄土詠史」李濟(「案邦文類」巻五、大正四七・二二五上中)、『正観記』巻中、戒度(「浄土宗全書」巻五、四六二頁)。

13 拙稿「案邦文類」の浄土思想的意義『印仏研』第三七巻第

蓮社列祖としての延寿と宗贖(柴田)

一号。』

14 『案邦文類』巻三(大正四七・一九五七)。

15 「観無量寿仏経序」、「蓮華勝会録文」、「念仏防退方便文」、「念仏廻向発願文」、「勸念仏頌」、「西方浄土頌」『案邦文類』巻二、五(大正四七・一六七上中、一七七—一七八下、二一九中—二二〇上)。

16 『仏祖統紀』巻二六(大正四九・二六四—二六五上、二七八—二七九上)。

17 「諸宗立教志」『仏祖統紀』巻二九(大正四九・二九〇—二九二下)。

18 たとえば、忽滑谷快天「禪宗思想史」下、三五三頁以下、拙稿「中国浄土教における唯心浄土思想の研究(一)」「札幌大谷短期大学紀要」第二六号、二四—二六頁、五〇—五三頁、拙稿前掲「中国における禪浄双修思想の成立と展開」。

19 小笠原宣秀「中国近世浄土教史の研究」一八二—一八五頁、鎌田茂雄「中国の仏教儀礼」四六〇、四八二、六三四、六三八—六四〇頁など。

20 「斥偽志」『釈門正統』巻四(統蔵巻一三〇、八二四頁)、『仏祖統紀』巻四七(大正四九・四二五上)。小笠原宣秀「白蓮宗の研究」『中国近世浄土教史の研究』。

21 従来の研究(註3)では「四料簡」を延寿の眞撰として禪浄双修を解釈する。延寿仮託とするのは、僅かに筆者と孔維勤『永明延寿宗教論』(一二四—一二五頁)と思われる。

(キーワード) 延寿、宗贖、蓮社

(札幌大谷短期大学教授)